第I章　序　　言

日本考古学で木器が研究対象になったのは，土器・石器・金属器・骨角器など他の遺物にくらべるとかなり遅れている。青森県是川遺跡の縄文時代木器などは1920年代からしられてきたとはいえ，全国的には木器の発見は断片的であった。木器の本格的な研究は1930・1940年代にはじまる。弥生時代の農具・食器などの木器が多量に出土した奈良県唐古遺跡・静岡県登呂遺跡がその引金であった。両遺跡の木器の検討をつうじて，土器・石器・金属器などではうかがいえない弥生時代の物質文化が解明され，木を素材とする器物の加工技術水準が決して低くなかったことが証明された。だが，当時では唐古・登呂遺跡はなお少数のまれな遺跡であり，各地での木器の様相が明らかでなかった段階では，研究に限界があった。木器は地下の滞水状態でしかのこらないという条件があり，一般的な集落・貝塚・古墳などが立地する乾地の遺跡では発見できないことが大きな制約になって，様式や形式の設定というところまで容易に到達しえなかったのである。

1960年代以降の大規模開発の多発化にともない，低湿地での開発行為が日常化し，それが発掘調査の対象になるにおよんで，各地における木器の出土量が急速に増大してきた。この緊急事態のなかで，木器をそのまま放置すれば形状が損傷し，消失してしまうおそれがあるため，木器に対する科学的な保存措置が焦眉の課題となった。1960年代の後半以降，ポリエチレングレコール法(P.E.G.)・真空凍結乾燥法・アルコールエーテル法などの保存技術がわが国で本格的に導入され，一応の成果をあげてきた。しかし，その反面において考古研究者はこの第1次的な処理におわれ，農具や祭祀具など一部の木器をのぞいて，ほとんどの木器がまだあまりよく研究されていないのが現実である。研究を困難にしている理由はほぼ，つぎの3点に要約できよう。

1　土器や石器などでは，食器や狩猟具・武器など比較的用途が限定されているのに対して，木器は材質が木であるという点が共通するだけで，その用途は多方面にわかれている。そのため，出土木器の用途を推測することに多くの研究時間を必要とし，部分の破片のみで用途を決定することが絶望的なときもしばしばある。2　木器は出土後できるだけ早く保存措置をほどこさなければ，変形し消失してしまうおそれがある。このため，出土直後に完璧な記録をとることが要請されており，この記録作業に大きな労力を費している現状。3　いまなお大多数の木器は水漬状態で保存しているのが実情であり，そのため取扱いがきわめて不便であり，遺物の比較検討を困難にしている。

近年，各地の発掘調査報告書のなかで，木器のしめる割合が次第に増加しつつある。そのなかで，一遺跡ないしは一地域ごとの木器研究はかなり向上している傾向がたどれるのである

が，都道府県の枠をこえた木器研究は上記の理由によりなお停滞しているといわざるをえない。かつて，1939年に出版された『弥生式土器聚成図録』は，その後の弥生土器研究の大きな指針となった。これと同じような全国規模の木器研究の実情をしめす図録の必要性が各地の発掘現場で感ぜられ，とりまとめの要望が当研究所によせられるようになった。当研究所ではそれにこたえるべく，全国の木器の大綱を樹立し，それを図録の形で出版する計画に着手した。とはいえ，一度に全国の木器資料を集積するのは至難のことであるから，全国をいくつかのブロックに区分して，年次をおって全国を網羅することにした。その第1回の試みが本書である。近畿地方を第1にとりあげたのは，縄文時代から奈良・平安時代にかけての木器資料がよくそろっており，実物の検討が容易だからである。また，古代篇として7世紀から12世紀までの木器をさきにとりあげたのは，当研究所が調査研究の主要な対象としている飛鳥・藤原京・平城京の遺物を中心にすれば，比較的短期間のうちに出版しうると判断したからにほかならない。

本書では7世紀から12・13世紀の近畿地方出土木器のうち1,347点を選択したものであり，各種の木器を包括しているのであるが，古代の木器の全体像を反映しているわけではない。これらの木器は川・溝・井戸・ごみ溜などに遺棄されたものであって，古墳の副葬品のように当時の葬送儀礼に対応して意図的に埋められたり，自然災害などで生活のある局面が瞬時に埋没した遺跡からの出土品でもない。一時の使用ののちにすてさるもの（箸とか祭祀具）や消耗率の高い木器（曲物とか下駄）などが中心であって，丁寧に取扱ったり，伝世する可能性が大きい貴重品（漆器などの工芸品）あるいは消耗率の低い耐久消費財（家具・調度品）の発見はきわめて少ない。

本書に集録した遺跡数は，三重県1個所，滋賀県14個所，京都府11個所，大阪府6個所，兵庫県8個所，奈良県13個所，和歌山県1個所である。このうち，都城遺跡である藤原宮・京，平城宮・京，長岡宮・京，平安京から出土した木器の点数が全体の72.8%をしめており，のこりの27.2%が地方官衙遺跡ないしは集落遺跡からの出土木器である。都城遺跡のうち平城宮からの出土点数がもっとも多く全体の36.6%をしめる(Tab. 1)。出土点数は発掘面積に比例し，調査期間の長い平城宮の木器が多数をしめるのはもっともであろうが，平城宮が木器の保存に良好な条件をそなえている点も看過しえないところである。

（府　　県）	（掲載点数）	（百分比）
三　　重	3点	0.22%
滋　　賀	85	6.31
長岡宮・京	119	8.83
平 安 京	67	4.97
その他京都	83	6.16
大　　阪	72	5.34
兵　　庫	79	5.86
藤原宮・京	69	5.12
平 城 宮	493	36.60
平 城 京	233	17.30
その他奈良	30	2.23
和 歌 山	14	1.04
計	1,347点	100.00%

Tab. 1　府県別木器掲載点数表

つぎに編集の途中で気付いた点をいくつかあげてみよう。まだ出土例は少ないが，7世紀代の木器には古墳時代からの古い形態をとどめるもの(刳物・曲物・下駄など)と，この時期からはじまる新しい種類の木器(斎串・人形・漆器など)が同時に存在し，時代の大きな転換点にあることをしめしている。8世紀の木器には，馬鍬・唐臼など新種の農具があり，かなり普及していたようである。新式農具の出現は7世紀に遡る可能性があり，古墳時代の農法とことなる新式の農法が行われていることを示唆している。

都城遺跡の木器構成と地方官衙遺跡ないしは集落遺跡の木器構成とをくらべてもっともことなる点は，自明のことながら，都城遺跡には確実に農業生産の場であることをしめす馬鍬・唐臼・田下駄などの農具が存在しないことである。都城遺跡から出土する鋤・鎌などは，都市建設のための土木用工具であって，農具ではない。8・9世紀段階では地方においては櫛・漆器など高級品に類する遺物の出土例は少なく，都城遺跡に集中する傾向にある。木履の普及は以外とおくれ，藤原京や平城京の段階では発見されておらず各地で発見されるのは8世紀後葉以降のものである。

平城京の東市周辺から出土した漆器の製作用具，平城宮から出土した百万塔未成品は，官営

工房が宮域内や京域内に所在したことをしめす。一方，里長の館舎に想定しうる兵庫県山垣遺跡から出土した一連の農具が未成品であることは，農村での自給生産体制が依然として存続していたことをしめしている。都城と地方とをとわず出土する曲物や轆轤挽きの木皿などは，量産体制を示唆するところの規格性にとんでおり，広域を対象にする流通網の存在を暗示しているようである。漆器の椀杯類が大幅に地方で増加するのは11世紀からのことであり，それ以前に漆を塗らない挽物の椀杯類が流布した形跡はない。つまり，古代における食膳器の主流はあくまでも土器であって，かつて民俗学者が提唱したような，白木の椀杯が普及したという現象はみあたらない。

以上，編集に際して気付いたことを羅列したのであるが，こうした問題を解決することだけが本書の主題ではない。本書ではできるだけ多種類の木器を掲載することにつとめ，今後できるだけ多くの人々の協力をえて，用途を決定しえない木器を少しでもへらすことを最大の目的にしている。

府県をこえる木器資料の集成は，当研究所のスタッフのみでなしうるところでない。府県市町村の全面的な協力をえなければ不可能である。本書の編集を企画するにあたりその主旨を府県の担当機関と協議したところ快諾をえたので，「近畿地方出土木器の集成研究」という集会を発足させた。この研究会は各地調査機関の担当者が参画し，1983年3月から1984年7月までに，奈良国立文化財研究所・東大阪市立郷土博物館・高槻市立埋蔵文化財調査センターで6回にわたって開催し，これ以外にも個別の協議をかさねた。

図録作成の基本方針はつぎのとおりである。1　木器実測図，木器解説，木器出土遺跡の概略，木器出土遺跡地名表，文献目録を内容の骨子にする。2　掲載する図面は実測原図のコピーをできるだけ縮尺を統一して用いることにする。3　すでに報告されているもののほか，1983年度段階までに出土した未発表の重要な木器を可能なかぎりとりいれる。4　各地の関係機関で作成した資料にもとづき，当研究所埋蔵文化財センターが統括し，編集する。

図録作成の具体的な作業工程はつぎのとおりである。1　各調査機関は木器実測図から実物大，ないしは2分の1大のコピー原図をつくり，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター（以下，奈文研埋文センターという）に提供。2　奈文研埋文センターではコピー原図を木器の種類別に分類し，掲載木器を選別。3　各調査機関では掲載木器の解説および木器出土遺跡の概略に関する文章を用意する。4　奈文研埋文センターは，掲載木器をできるだけ統一的な表現で製図する。5　木器の木取り，樹種などの資料不足のものについて再調査。6　木器出土地名表および木器出土文献目録をととのえる。7　奈文研埋文センターで以上の資料を統括し，出版する。

実際の作業は必ずしもこの順序で進まなかったが，基本的な資料がととのったのは1984年の7月である。奈文研埋文センターでは，田中琢センター長および佐原真研究指導部長の指導のもとに町田章と上原真人が最終的な編集を行った。また，原稿のワードプロセッサーによる浄書については若井明・長谷川陽美の両氏をわずらわし，英文目次は D. サッサー氏と岩永恵子氏が作成した。

本書の作成に対し，多忙ななかを積極的に作業を進行していただいた各地の機関および担当者は以下のとおりである。

三重県教育委員会文化課　　伊藤久嗣・吉水康夫・山田　猛

滋賀県教育委員会文化財保護課　　兼康保明・田中勝弘

京都府教育委員会文化財保護課	平良泰久
京都府山城郷土資料館	高橋美久二
向日市教育委員会管理課	山中　章
京都市埋蔵文化財調査センター	北田栄造
(財)京都市埋蔵文化財研究所調査部	百瀬正恒・中村　敦・岡田一男
大阪府教育委員会文化財保護課	井藤　徹
高槻市立埋蔵文化財調査センター	森田克行
東大阪市立郷土博物館	芋本隆裕
(財)大阪文化財センター	石神幸子・村上年生・山口誠治
(財)大阪市文化財協会	八木久栄
兵庫県教育委員会社会教育文化課	平田博幸
神戸市教育委員会社会教育課	奥田哲道
奈良県立橿原考古学研究所	藤井利章・河上邦彦
奈良市教育委員会文化財課	西崎卓哉
(財)元興寺文化財研究所	松田隆詞・内田俊秀
埋蔵文化財天理教調査団	置田雅昭・日野　宏・山内紀嗣
奈良大学文化財学科	酒井龍一
和歌山県教育委員会文化財課	吉田宣夫
岡山理科大学	鎌木義昌・亀田修一
奈良国立文化財研究所	
平城宮跡発掘調査部	工楽善通・金子裕之・山崎信二・松村恵司・杉山　洋・岩永省三・花谷　浩
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	菅原正明・土肥　孝
埋蔵文化財センター	町田　章・山中敏史・上原真人・光谷拓実・松井　章

最後に，各地の個人および教育委員会など多数の人々の協力をえて本書はなりたっており，芳名を掲げて謝意をあらわす。

山本雅靖〔上野市教育委員会〕，山口順子〔(財)滋賀県文化財保護協会〕，栗東町文化体育振興事業団，中主町教育委員会，守山市埋蔵文化財センター，長浜市教育委員会，高島町歴史民俗資料館，今津町教育委員会，長岡京市教育委員会，野上丈助〔大阪府立泉北考古資料館〕，中井一夫〔奈良県立橿原考古学研究所〕，渋谷高秀〔(社)和歌山県文化財研究会〕